

なつたとのこと、三歳になる子供だけ着のみ着のまま何一つ持ち物もない有様で、「公安隊に家財一切没収され、ほうり出され、苦しい生活を続けてきました。本当に体だけで、一物も持ってこれなかった。」と妻は泣きながら一部始終を話して、「乞食よりもまだひどい有様であった。生きて再び会えたことが何より。」と。自分だけでない日本人全部がそうである以上、やむを得ぬことであるからと、再会ができてこんな嬉しいことがあるものかと共に慰め合った。そして、哈爾濱で引き揚げまで苦勞はあっても我慢していこうと契り合った。

昭和二十一年八月、引き揚げ命令が出て、約五十五日間もかかって佐世保南風崎港に上陸したのが十一月であった。

約十年近く、一番働ける時が空白になったことが今なお頭の中に残り、苦難の道を切り開くことは容易ではない。尊い命運は死んでも忘れることはできない自分の一生。既に八十五歳の高齢に達し、残り少ない寿命をどう開けるか、もはや遅しの感あるのみである。

旧満州国東三河郷開拓団顛末記

愛知県 瀧川 辰雄

昭和十四年六月四日、敦賀港を出航する移民輸送船、気比丸で、私は満州開拓愛知県第九次東三河郷建設基幹先遣隊二十人の一人として渡満した。そして第五次永安屯開拓団で約九か月間の現地訓練生として、木村直雄団長らから指導を受けた。当時の訓練生の月給は一円であった。今も語り草であるが、山鳥の雄が一羽一円で買えたから「雄一羽、月給の味、おわりけり」と言って笑いあったものである。とにかく安い月給だった。

入植地は興安省と竜江省の境界の大平原で十か所に開拓団（三千戸、一万五千人）を入植させ五年間で、一万ヘクタールの一大農業楽園地帯を構築する計画である。愛知県は一開拓団三百人を送り込んだ。しかし、耕地は低温地帯で雨となると河が氾濫して、農作物を流出させてしまう。

その洪水防止のため、零下四十度の中を六頭引きの大馬車で、拉哈駅まで六十四キロの道を建設資材を運搬して改修工事をしたが、長雨続きや冷害で十六年になっても満足のいく農作物は収穫できなかった。団員の中には「家族を飢え死にさせたくない」と日本に帰る騒ぎだった。

高台地にある満人所有の耕地の買収を満州拓殖公社と関東軍に働きかけ、買収に成功しその後は順調に農作物が収穫できた。十八年には全満開拓団中第三等という糧穀供出で、関東軍から表彰を受けるほどになった。

二十年八月十五日正に晴天の霹靂、日本が降伏せりという大鉄槌が下されたのである。この時、私の開拓団から召集された団員は八十余人で、団に残る男子は四十余人、それに女子と子供が四百余人であった。日本が無条件降伏後のこの北満の地に、男たちだけを召集し、後はあたかも塵芥の如く捨て去られた日本人集団を守っていかなければならない私たち。これから一体どうしたらよいか、ソ連軍の進攻も間もない。

付近住民の話では、ロモーズは獐猛無残な性質で、少

しでも抵抗するとピストルで射殺される。満人からも蛇蝎の如く思われているのだ。私たちは部落長会議を開き、一にも二にも無抵抗主義をとり、四百余人の家族集団を一人でも多く日本に帰すことが、私たち男の至上命令だ。どんな悲しい事が起こっても家族集団を守ろうと、堅く誓い合った。

八月下旬には夏目幸夫団員が、満人に惨殺されるなど、匪賊の襲撃や、略奪が相次ぎ、九月中旬には大島藤吉団員の銃殺もあって、開拓団の物資はほとんど皆無となり、万策尽きて、東に二十キロ離れた熊本県出身者の東陽開拓団へ移動することになった。

昭和十五年の新春に希望と大きな夢をかけて入植した東三河郷開拓地を去るわけだが、日本から運んだ農機具や色々な機械類から牛、豚、鶏までありとあらゆる物は、全部持ち去られ、六年間築き上げた開拓地は廢墟と化している。何んという陰惨な別離であるうか、何んのための苦しい大地との闘いだったのか、北満の十月中旬といえは、零下の大地は凍りつき、折りからの厳しい北風は粉雪を運んでくる。家族全員が無事に故国日本に帰れる

ためには、どんな方法がよいかと考えると思わず、身ぶるいが止まらなかつた。

二台の大車に幼児と老人、妊婦を乗せ団員とその家族あわせて四百六人は、匪賊の襲撃に脅えながら東陽開拓団に着いた。東陽開拓地は一度も匪賊の襲撃を受けたこともなく、ソ連兵の進攻もなかつた。着のみのままで食糧もない私たちに村田勝東陽開拓団長らは、心からのもてなしをしてくれた。

しかし、着替えがない、フトンも毛布もない。食糧も欠乏するという毎日で、すすのおカユもなかつた。団員と家族は栄養失調や発疹チフス、それに猛烈に繁殖するシラミの三方から攻められ顔は青白く、頬はこけていった。痩せ細った手を差しのべて「日本へ帰りたい。死にたくない。」と涙ぐみながら、かすかな声で訴えながら死ぬ人が、十二月から二十一年二月にかけ、厳しい零下四十度の寒さも手伝って、毎日のように死者が出た。

念願の帰国命令を受けたときは、東陽開拓団に亡命したときの四百六人が二百人に減り、二百六人が夢にまでみた故国の土を踏むことができなかった。私たちは江北

四十一大隊として二千四百余人が一団となりチチハルから引揚げ列車に乗り、十一月三日に佐世保に上陸できた。東陽開拓団に亡命したのが帰国を可能にしたわけで、心から感謝申し上げます。

私たちは敗戦国の棄民集団だったことをいやというほど思い知らされました。改めて戦争の大きな歯車が、いかに犠牲を強いるか、私たちは忘れない。

こんな悲劇は二度と繰り返すべきではないと心から訴えたい。

二百六人のご冥福を祈りながら。

北満の痛恨

兵庫 門 田 幸次郎

満鉄のハルピン駅から、浜北線北安行き急行列車が、はるかな地平線を目指して、広漠果てしない平原を走る。こと七時間ばかりのところに、波にただよう粟粒のような「綏稜」という小駅があった。